



TITLE:

計画1-8 鈴鹿山系におけるニホンザルの分布(Ⅲ 共同利用研究 2.研究成果)

AUTHOR(S):

増井, 憲一

CITATION:

増井, 憲一. 計画1-8 鈴鹿山系におけるニホンザルの分布(Ⅲ 共同利用研究 2.研究成果). 霊長類研究所年報 1991, 21: 55-56

ISSUE DATE:

1991-09-30

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/164275>

RIGHT:

近畿圏におけるニホンザル分布の実態調査の2年目として、本年度は兵庫県を中心として分布状況の調査を行った。

調査質問紙を県下各市役所、町・村役場（91市町村）に送付し回答してもらったところ、回収率は約75%であった。1978年の環境庁の「緑の国勢調査」の調査報告では、1）篠山町から京都府境にかけての多紀連山、2）神崎郡大河内町付近、3）佐用郡南光町、4）美方郡美方町、5）洲本市灘の5地域で集団の生息が確認されたと報告されているが、今回の回答結果からも概ね同様の地域で集団の生息が確認された。これに対して、今回の調査結果では豊岡市、城崎町、竹野町、日高町などの但馬北部に集団の生息が確認され、1978年の調査結果で確認されなかった地域で集団の生息が確認された。この地域の集団は、近年になって姿を現し農作物に被害を及ぼすようになったようである。元々近くの山に生息していた集団が植林の影響で農地へ出てきたのではないかと報告もあった。このように、但馬地方においては集団数および分布域が以前より拡大している可能性が考えられるが、集団数、個体数あるいは遊動域等の細かい点についてはよく分かっていないのが現状であり、結論を出す前に詳細な調査が必要であると思われる。

また、これら集団の生息地の間で、集団ではないがハナレザルなどの存在が確認された地域が多くあった。1978年の調査結果と比較して確認された地域は増えているものと思われる。集団の生息ではないが、集団間の個体の移動を実証する資料として興味深い。

来年度は、特に但馬地方を中心として調査を行い、兵庫県下におけるより精度の高い分布状況を明らかにしたい。

計画1-7:

伊豆・箱根地域のニホンザルの分布と個体数

岡野美佐夫・宮本大右・濱崎伸一郎
(野生動物保護管理事務所)

伊豆・箱根地域のニホンザルの分布と個体数を調べるため、郵送アンケート調査、聞き取り調査、カウント調査を実施した。

箱根地域については昭和30年代から分布に関するデータが蓄積されているため、アンケート調査

は省略し聞き取り調査で分布変化の把握に努めた。その結果を動物分布調査（環境庁1978年）の分布メッシュ図と比較すると、群れの生息区画数が10から9に減少し、群れ以外の生息区画数が1から2に増加しただけで区画数に大きな変化は認められなかったものの'78年調査で生息が確認されていなかった箱根地域北部（小田原市北西部、南足柄市南部）への分布拡大が認められた。また、1986年に神奈川県が実施した調査では5群（S、H、T、P1、P2）の生息が確認されていたが、このうち箱根町の畑宿に定着していたとされるP2群は聞き取り調査で確認されず、移動ないし消滅したものと判断された。平成2年の9月に実施したカウント調査の結果は、S群が55頭、P1群が21頭であり、'86年調査の結果と比較すると2つの群れとも漸増している。この他、聞き取りによりH群と思われる群れが約50頭いるとの情報を得たが、T群の個体数については情報が得られず、箱根地域全体のニホンザルの個体数の変化に関しては、今後も調査を継続していかなければわからない。

伊豆地域に関しては郵送アンケート調査とこれを補足する聞き取り調査を実施した。アンケートは農協の各支所と鳥獣保護員を対象に191通を配布し、回答率は60.7%（116通）であった。その結果群れの生息を確認した地域は、愛鷹山東部から南部にかけての地域（裾野市、長泉町、沼津市）、箱根地域に隣接した熱海市北部および函南町北東部地域、天城山脈より南の伊豆半島南部地域（東伊豆町、河津町、下田市、南伊豆町、松崎町にまたがる地域）の3地域に分かれた。'78年の分布調査（環境庁）と比較すると群れの生息区画数は42から32に減少し、群れ以外の生息区画数は15から26に増加した。実際に群れの分布が縮小したかについては、さらに聞き取り調査を実施し検討する必要がある。また、群れサイズに関しては、平成3年度の共同利用研究で調査する予定である。

計画1-8:

鈴鹿山系におけるニホンザルの分布

増井憲一（森林生態研究会）

鈴鹿山系において1975年以来ニホンザルの分布と生息状況に関する資料の収集を断続的に行っているが、1990年7月中旬に1週間、本共同利用

研究費を用いて、同山系北部での現地調査及び聞き込み調査を集中的に行った。調査地は滋賀県神崎郡永源寺町から、岐阜県不破郡関ヶ原町をへて、三重県員弁郡大安町までの範囲で、霊仙山、御池岳、藤原岳、竜ヶ岳など1100m前後の山々を含む。

山間及び山麓の集落の大部分でサルの出没と猿害が認められたが、山間の村では過疎化が著しく廃村化しているところも多く、詳しい情報を得ることができなかった。その一方山麓部では、この10年から15年の間に、それまでサルなど出たこともないところで、突然群れによる食害が発生しその後も被害の絶えないところがおおい。とくに、滋賀県永源寺町、愛東町、湖東町付近、及び三重県藤原町、北勢町付近では、山麓部からさらに平地部にもサルが進出しており、水田や畑に取り囲まれた雑木林や杉林をねぐらとして野荒らしに出回ることさえあるという。

では山中の環境条件がニホンザルの生息に好ましくなり、個体数が増加した結果、山麓部に分布を拡げてきたのだろうか。現地調査の印象からいえば、全く逆であり、サルの生活を支えていた広葉樹薪炭林は、ほとんど全域において生物相の貧弱な針葉樹人工林に造り変えられており、住みかを追われ、「難民」化したサル達は、なり振り構わず人里に近づき、野荒らしで身をしのいでいるのであらうとおもわれた。

本山系に限って言えば、分布域の拡大が必ずしも生息条件の良好化や個体数の増加を意味しないというのが目下の予測である。

課 題 2

計画2-1:

屋久島野生ニホンザル群における群れの消滅と隣接群へのメスの移入過程

竹門直比(京都大・理)

屋久島西部の海岸林に生息するM群では、近年、個体の消失が相次いだ。筆者が観察を開始した1984年春には、16頭を数えたM群も、1989年夏の時点で、オトナオス1頭、オトナメスと娘のワカメスの計3頭となった。この段階で、オスは単独行動が増え、母子のメスは、音声交換もほとんど行わなくなり、南から侵入してきたH群に

占有域のほとんどをのっとられてしまった。

1989年の交尾期が始まると、オスは北に隣接するT群へ移籍した。メス2頭は、オトナメスが発情するとH群に追従し、H群のオスと交尾していた。ただしオトナメスは、オスとのみ親和的な交渉をもち、H群のメスには攻撃されていた。これに対しワカメスは、H群のワカメスと毛づくろいをかわし、音声交換に加わって、メスとの交渉を行っていた。しかし、オトナメスの発情が終わるとかれらはH群とは別行動をとった。

1990年4～5月の調査時期は出産期にあたり、H群では3頭の赤ん坊が確認された。M群のメス2頭は、いずれも出産は確認されなかった。

H群の遊動域は北へ移動しており、もとのM群の遊動域内を遊動していた。M群の2頭のメスは、周辺部ではあるがH群の動きに追従しており、移籍の兆しを見せていた。

オトナメスは、H群のメスに接近するのを避けており、毛づくろいや、伴食関係をもつのはオスとに限られていた。しかし、音声交換には参加するようになり、H群のメスの方から毛づくろいを要求することもあり、前年の交尾期に比べ、メスにも受け入れられていた。ワカメスは、母親のオトナメスと離れて、H群の中で毛づくろいや伴食を行うことも増え、よりH群の中に定着していた。

メスは生まれた群れで一生を過ごすニホンザルの社会でも、群れの消滅という極限状態におかれると、メスは群れを移籍して生き残るという手段をとることが、この調査で明らかになった。メスは、ソリタリー生活をおくることは難しく、たとえ、新しい群れの中で攻撃を受けようとも、移籍という道を選んでいる。またこの際、オトナメスよりも、ワカメスの方が、メスの社会に受け入れられやすいということができよう。

計画2-2:

ニホンザル野生群におけるオスの社会的発達

鈴木 滋(京都大・理)

屋久島西部海岸域において1987年度以降継続して野生ニホンザルT群の観察を行なった。本研究では、非交尾期にもコンパクトな集まりを保ち、複雄複雌群で生活するニホンザルで、ワカモノからオトナへの移行期にあるオスが、非性的なオスー